

農家が見たラトビア

私は大学・大学院で畜産学を専攻し、家業である小栗牧場で和牛を飼育している。牧場の仕事は、基本的に休みの日はなく、また伝染病などの関係もあり、外国に自由に行くこともできなかった。そんな中、日々自分の視野が狭くなっていくことに不安を感じて、本事業に応募した。参加にあたって経営者の目線からいろいろな物事、団の運営や団員の行動などを見ることを心掛けた。また、私の専門は食と農業であり、とりわけ家畜及び畜産物には大変興味があるので、ラトビアの食と農業に関心をもって行動した。

ラトビアの農業については事前に調べておいた。穀物自給率は99%（日本は約28%）であり、酪農・穀類・ジャガイモが主要な品目であり、また花卉や甜菜（砂糖大根）の生産も盛んであるとのことだった。実際ラトビアに行って、上記の品目はよく見かけた。ライ麦パンなどのパン類は主食として、オートミールやお米（タイ米）も食事でよく見かけた。乳製品であるチーズやヨーグルトの種類の高さには驚いた。牛乳由来だけでなく山羊乳由来のチーズもスーパーで見かけた。そして何よりも驚いたのがジャガイモである。非常においしい。しかし、給仕される量が多く日本人参加者の大半が残しているのを見かけた。ジャガイモはほとんど毎回の料理でどこかで使われていたので、日本におけるお米のような存在なのだと感じた。食事中、ラトビア青年を観察しているとジャガイモが好きようだった。

ラトビアの人たちと話していても農業にそれほど関心が高いようには感じなかった。これは日本でも同様だと思う。一方で、食べ物に関心の高い人は日本よりラトビアの方が多く感じた。その理由の一つは、ベジタリアンやビーガンの割合が日本に比べて多かったからである。ラトビアで出会えたユースの数はそれほど多くないが、ベジタリアンもしくはビーガンが数人いた。この割合は日本で見かけるよりも多い印象だった。ベジタリアンであること、即ち食に対して意識が高いとは考えていない。しかし、少なくとも自分の食べるものに関心を示し、自分で選択していたことは事実である。また、レストランなどもベジタリアン用メニューを準備してい

たので、日本もこれから東京オリンピックに向けて対策が必要だと感じた。しかし、牛肉を生産している私としては、できれば日本の和牛を食べてほしいという複雑な心境である。二つ目の理由は、特に地方では家庭菜園が盛んなことである。家庭菜園だけなら日本の地方でも見られるが、ハーブ・キノコ・リンゴなど多種多様なものを栽培していた。私のホームステイ先でも、ハーブを自家で栽培し乾燥させたハーブティーを飲んでいた。私自身も最近ハーブに関する勉強を始めて、ハーブティーへの関心も高まっていたので、様々な質問を試みた。なぜ、様々な植物を自家で育てているのか考えてみると、食費の節約と食品添加物の二つの理由が考えられた。物価は日本に比べて若干安く感じたが、牛乳・卵・ガソリンの価格はほとんど差がなかった。一方で、一人当たりのGDPは日本とラトビアでは2倍以上の差がある。そのために食料品への支出を抑えるために家庭菜園に積極的である可能性がある。また、食品添加物を気にしている人も多かった。特にハーブとはちみつにおいて「スーパーのものは食品添加物が多いから気を付けたほうがいい」と助言を受けた。このような食品添加物への関心も家庭菜園に積極的な理由の一つであると思う。また、地方では都市部に比較して家の敷地が広いということも家庭菜園をするきっかけとなっているのだろう。私も経験していることだが、自ら食べ物を生産することでその食べ物を中心に食品全体に関心を持つようになる。ラトビアの人達が家庭菜園を持っていること、また日本ではあまり見かけないベジタリアン・ビーガンの方々と交流したことで、ラトビア人の食への関心が高いと感じた。

今回のラトビア派遣において最も重点が置かれていると感じたプログラムはディスカッションフォーラムであり、18日の派遣期間のうち3日間に及んだ。このプログラムではアイスブレイクなど様々な交流が用意されていた。開始直後はお互いのことを知らず、コミュニケーションをとることや意見を言うことに少し難しさを感じていた。しかし、ラトビア人ファシリテーターが上手にみんな

の緊張をほぐしていた。また、コーヒープレイクの時間もリラックスしながら話げできた。この時間に上記のハーブティーの情報も収集できた。日程が進むにつれ、徐々にSDGsに関連したトピックで話し合いを進めていった。Decent work(働きたいのある人間らしい仕事)をテーマとして、4、5人で話し合った。まず、すべての労働者が仕事にやりがいがあり、相応の賃金を得られるべきということを理想として話していた。しかし、私は疑問を感じていた。その場合皆がやりたくない事は誰がやるのだろうか、やりがいは提供してもらうものでなく自分で見つけていくものでないのかと。また、ラトビアでは就職前に会社にインターンとして1年ほど就業体験すると言っていた。そこでは低賃金で仕事をさせられているとラトビア参加者が不満そうに話していた。しかし経営者側からしてみたら、仕事を教えながら、まだ生産性の少ない研修期間にも正規の給料を払うのは大きな負担であると思った。Decent workについてディスカッションしているとき、自分は経営者的な視点で考えていると実感でき、一方で採用される側の気持ちもよく分かった。このことをヒントに将来の経営に役立てていきたいと考えている。

Food waste(食品廃棄)のトピックについても話し合った。これは先にも述べたが、ラトビアに来てから、常に給仕される食事の量が多く、ほとんどの参加者が食べ物を残していたためテーマとなった。とても興味深い話題だった。英語は非常に苦手で、意見を言うことも難しかったが、テーマ決定後の夜にしっかり準備をして次の日の話し合いに備えた。おかげで自分のアイデアも採用され、自信につながった。事前に準備するというのは当たり前のことだが、きちんとやり続けるのは難しい。そんな中とてもいい成功体験となったので、この経験は忘れないだろう。チームメイトとも非常に仲良くなれ、充実したディスカッションフォーラムだった。

応募当初は、普段の生活ではできないことをして、見えないものを見ることで、自分の人生にとって大きな衝撃になると期待していた。しかし、実際に全日程を終えると、衝撃的なことや全く初めての経験ということは少なかつたように感じる。その中で一番印象に残っていることは、自分の英語力のなさであった。言いたいことが言えない、聞きたいことが聞ききれないというのは大変な機会損失だったと思う。この課題を心に留めておきたい。しかし、英語ができないことは悪いことばかりではなかつた。プログラム中に様々な場面で他の団員が手助けしてくれ、またラトビアの参加者も一生懸命理解

してくれようとしてくれた。これらの行動で私は非常に親しみを感じ、かえって仲良くなることができたと感じた。言語を超えたコミュニケーションの存在が少し分かった気がする。これから普段の仕事に戻るが、その中で今回経験したことを反芻しながら考え、行動し、成長していきたい。

今後具体的にやっていきたいことは、まずハーブを栽培したいと思っている。ハーブティーを飲むたびに今回の事業を思い出さるう。また、今回ホームステイ先では、非常に優しくしてもらい、家族のように接してもらった。彼らと今後も繋がっていくのは当然であるが、今度は私も外国の方を精一杯もてなし、交流したいと考えている。そのため今後は自分もホームステイを受け入れ、一生の出会いを築いていきたい。

自分の専門分野は畜産学、特に和牛である。ラトビア人に見習い、和牛・牧場を通して少し周りの人にも食に関心を持ってもらいたい。例えば、実際に生産現場を見て実情を知った上で牛肉を食べる。するとこれまでより味わって食べてくれるのではないか。これが「心を豊かにする」一歩だと思う。他にも様々な方法で、世の中に影響を与えることができるのではないか。

私が社会に貢献するために、まだまだやりたいこと、やれることは増えていくと思う。そのために今回できたラトビア派遣団の繋がり、プログラムで出会ったラトビア人との繋がりを絶やさず、さらに今後IYEOの活動でできる新たな出会いに期待して、これからの人生を歩んでいきたい。

本プログラムを通してご尽力頂いた内閣府青年国際交流担当室の皆様、一般財団法人青少年国際交流推進センターの皆様、特にラトビア担当の大久保さん、そして田口団長、三橋副団長に感謝の意を表す。ラトビア派遣団の皆さんも素晴らしい経験をさせてくれてありがとう。

東欧の一国を通して見えてきた自分の夢

小

「ラトビア」と聞いてその国旗が頭に鮮明に浮かぶ人は、日本に果たしてどのくらいいるのだろうか。有名人が思い浮かぶ人は。国の形が思い浮かぶ人は。バルト三国の見分けがつく人は、果たしてどのくらいいるのだろうか。

私たち内閣府国際青年育成交流事業ラトビア派遣団参加青年総勢11名は未知の国ラトビアで18日間のプログラムを終えた。たくさんの出来事があり、あっという間の時間で、夢のように儂い瞬間であった。ラトビアでの活動については語るに絶えないが、ここでは特に心に残っている内容について披露したいと思う。

プログラムの中で心に残っている内容は二つ、時間の密度の濃かったラトビア参加者とのディスカッションとホストファミリーと過ごした3日間である。共に人が大きく関わっているプログラムであり、「幸せ」について多く考えた時間であった。

ディスカッションはラトビア参加者(18~26歳)と3日間泊まり込みで行われた。ホテルで寝食を共に過ごし自国の社会問題について、お互いの国の環境や視点からディスカッションを行い、深掘りしていく。万人に通ずる正しさとは何か、理想と現実、日本とラトビア、個人個人の固定概念の間で妥協点を見つける、言語も違う中、手探りで進む過酷な合宿であった。理論でぶつかり、吸収し合い、シビアな時間を過ごして「みんなの幸せな社会」についてそれぞれが考え、育つ環境の違う仲間とどう次の世界を作り上げていくのか、来たるべき未来の予行練習のような試行錯誤を繰り返していたのだと今にして思う。

その反面、コーヒープレイクや食事、自由時間は本当に楽しく過ごした。ダンスを踊ったり、クイズをしたり、湖畔でダラダラ将来の夢を語ったり。社会問題ではなく仲間として個人と向き合う、貴重な意見交換の時間であった。感情で馴れ合い、同情し、笑いあって楽しく気軽な時間を過ごし、人生におけるパーソナルな幸せについて誰が言うでもなく共有しあって、頷いて、自分の夢を広げた。

客観的に見ると稚拙で絵に描いたような「幸せな社会」であったり、願望を縫い合わせたような夢であったかもしれないが、私たち青年にとっては間違いなく「幸せ」への第一歩である。ここで描いたものが人生経験とともに研ぎ澄まされていき、将来現実可能性の高いものとなって私たちの前に再び現れるだろう。オン・オフの時間の明確な切り分けが、3日と短い時間でも日本とラトビアの心を引き出し、“See you again around the world!”と手紙をやり取りするような国を超えた友人を作るに至ったのだと感じる。

ホストファミリーとの時間も同様に短かった。旅疲れで睡眠に費やしてしまった時間もあるので、本当にゆっくり話ができただけの時間はどのくらいだったのだろうか。

ホストファミリーは無条件に私たち心に開いてくれた。まるで旧知の間柄のように。久しぶりに再会した家族のように。初めてのホストファミリーで緊張していた私にはどれだけありがたかったか、計り知れない。冗談を交わし、ご飯を一緒に食べて、よく分からない映画をみて、一緒にビールを飲んで。「何気ない日常に幸せを感じる」人はよくそう言うけれど、初めてその意味を心から理解できたように思う。

争いも、生命の危機もない平和。大切な人が近くにいる、健やかに年を重ねる。それがどれほど幸せで、どれほどの努力の基に成り立つ幸せなのか。父が仕事で家庭を守り、母は家事で平穏を守り、姉は勉学で希望を守り、弟は運動で健康を守る。それぞれにそれぞれの役割があり、みんなで幸せを守る団結感を感じた。

どちらも何気ない、しかし非日常な人との交流であった。誰かが欠けていたら、実現し得なかった現実。奇跡の上に成り立った単純で幸せな巡り合いに感謝するばかりである。

共和国ラトビア。多くの日本人はその社会福祉制度や幸せ度数の高さから羨望の目線で北欧をはじめとしたヨーロッパの国々を見上げる。しかし隣で感じたラトビアは、現状に不満タラタラのパワフルな若者であったり、自分の力で家族を幸せに導く父親だったり、夫を

信じて家を守る母親だったり、普通の人たちであった。ただ、その想いの強さや覚悟が日常を守り、その日々が彼ら彼女らを幸せにしている。そして幸せを自覚している。ただそれだけであった。

ラトビアでの出会いは私に幸せを教えてくれ、自分の人生を強く生きる、自分の生まれた国や状況を肯定し、自分らしく生きる覚悟を決めるきっかけをくれた。

最後にプログラムを通して定まった、私の目標、自分らしい生き方の一部をこの場に記して締めたいと思う。

私の心に残っている言葉として、研修中によく耳にした「日本青年代表としての自覚」がある。青年代表として派遣される私たちはラトビアでは「日本代表」という肩書きで見られる。しかし私が本当の意味で「国を代表する」という意味を心から理解したのは、残念ながらラトビアに着いた後であった。

ラトビアではライモンツ・バーヨニス大統領への表敬訪問と、藤井眞理子在ラトビア日本国大使館特命全権大使への表敬訪問の機会をいただいた。端的に言って、自分の無知を悔いるばかりであった。訪問国への知識不足。自分の認識の甘さへの恥ずかしさ。想像以上のラトビアの国際的立場の難しさ、日本の経済的優位性を実感した。知識と知識を集める努力を当時の私は圧倒的に欠いていた。「青年代表」だからこそ大目に見られたが、「日本代表」として失格であった。

「国を背負って立つ」ということとはどういうことか。「青年よ、大志を抱け」とは言わずとしたクラーク博士の名言だ。このフレーズだけが有名になってしまったが、この名言に続く言葉が数パターンあったと言われている。その中でも、私は次の言葉に「国を背負って立つ」の意味が垣間見えているのではないかと思う。

“Be ambitious for knowledge, for righteousness, and for the uplift of your people. Be ambitious for the attainment of all that a man ought to be.”

友人、恋人、家族。もしくは人からの評価や、社会での地位、周りからの期待。背負っているものは人それぞれだが、人は必ず何かを背負っており、それは例外なく人か想いのどちらかである。それらを背負って立つためには知識と正義が不可欠であり、その過酷な道の先に人としての成長点が存在する。「国を背負って立つ人」というのは、国民とその想いを一身に受けて、実益と心理戦の世界で戦っている人間だ。

国のために力を尽くしている方々の佇まいは憧れとして、今なお私の頭に焼き付いている。日本青年を代表して全うした国際青年育成交流事業。私は自分を磨き

直して、もう一度日本を代表して世界に立ちたい。

今も変わりゆく世界情勢で、日本や多くの国が何事もなく日常を迎えられているのは、それぞれの国を代表して世界で動き回っている人たちのおかげである。国を背負って世界で活躍する方々と出会い、憧れた。代表として訪れた先で、認識がとても甘かったことに悔しさを感じた。これから先も日本が平和であるために、そして世界が平和になるために、相互の文化理解と協力で国際社会の安定に力を尽くしたい。このプログラムをきっかけに私は外交官を志す。自身の気持ちに実直に、自分らしさをもってこの職に就きたいと思う。

最後になってしまったが、プログラム成立に関わった全ての人に感謝を示したい。私はこのプログラムに人生を変えるきっかけと目標をもらった。このプログラムで出会った人たちは、人を気遣い、自分の考えを持ち、人生を見通し、覚悟を持っていた。彼らは私の憧れであり、語るに絶えない。それぞれから多くの感情と学びをいただき、安全に帰国し、無事プログラムを終えることができた。この地球での幸運な巡り合わせと、様々な方のお力添えに深く感謝する。